The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	一九四五年五月-八月 〈あの〉戦争の終わりと敗戦の始まり
Author(s)	内海, 紀子
Citation	太宰治スタディーズ. 2016, 6, p. 48-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57195
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【戦局】

▼5月

・ヒトラー死去の報。ベルリン陥落。

・全ドイツ軍降伏、無条件調印。

▼6月

・天皇臨席の最高会議で、本土決戦の方針が採択される。

・3月以降、沖縄に上陸していた米軍の攻撃で、沖縄の日本軍守備隊全滅。

▼7月

・連合国がポツダムで会談、日本に無条件降伏を要求。

▼8月

・6日、広島へ原子爆弾投下。

・8日、ソ連が対日本宣戦布告。

・9日、長崎へ原子爆弾投下。

・14日、御前会議でポツダム宣言受諾を決定。

・15日、天皇、戦争終結の詔勅を録音放送。

・30日、連合軍最高指揮官ダグラス・マッカーサーが厚木飛行場に到着。横浜にGHQ（連合軍総司令部）設置。

一九四五年五月―八月　〈あの〉戦争の終わりと敗戦の始まり／内海紀子

一九四五年五月から八月にかけ、太平洋戦争は後退戦を戦えない戦争の様相を漂わせる。

七月八日付「朝日新聞」朝鮮版は、「急げ半島の要塞化！」（朝鮮総督府）と銘打って、「血で稼いだ時を生かせ」、「今や本土は鉄壁の要塞化全く成れり、彼奴等の上陸を今や遅しと待ち焦れてゐるのだ、いざ遂げん半島完璧の要塞化を！」と叫んでいたが、当時既に本土空襲は深刻化し、沖縄に上陸した米軍に対し、日本軍守備隊は部隊全滅を繰り返しながら本島南へ追い詰められていた。

前年一〇月に、レイテ沖海戦で神風特別攻撃隊が初めて出撃した。それから半年余後、一九四五年五月から八月にかけて、新聞紙面には連日「特別攻撃隊」に言及する記事が掲載されている。「押戴く血染の鉢巻　可憐な女学生の贈物に勇躍して　振武特攻隊、必殺の出撃」（「朝日新聞」五・一）、「特攻隊基地に薫る一挿話」（五・五）等、特攻隊員の人柄を伝える一挿話や、特攻隊員と上司、または一般市民との心温まるふれあいや、特攻隊基地への訪問記など…。〈特攻隊員をめぐる美談〉の需要供給は尽きぬように見える。

ところで〈特別攻撃隊〉は、戦後七〇年経った現在では、太平洋戦争末期の極限的な状況下で、進退極まった日本軍が最後に打ち出した必死必勝の秘策というイメージでとらえられることが多い。〈特攻〉は、その是非は措き、自らの命を捨てて祖国の礎となろうとする若い隊員たちの「大和魂」と純誠な決意によって成し遂げられる行為であるとされる。ゆえに〈特攻隊〉は日常を超越した崇高な美の表象として描かれる（映画『永遠の0』等）。

しかし当時の新聞は、〈特別攻撃隊〉を非日常どころか常態化した出来事として記述していた。〈特別攻撃隊〉を戦時下の日常の一コマとして織り込みつつ、「薫る一挿話」を消費しようとするまなざしを見てとれる。特別特攻隊の意義を議論することはもちろん、〈特攻隊〉の存在を「伴わない」日常を想像することも、もはや不可能となっているようだ。

＊＊＊＊＊

▼9月
・2日、重光葵、梅津美治郎両全権、米艦ミズーリ号艦上で降伏文書に調印。

【社会】
▼5月
・久米正雄・高見順・川端康成らが鎌倉在住の文士等の本を集めて、貸本屋「鎌倉文庫」を始める。
・六大都市以外のガスの供給停止。
・戦時教育令を公布。
▼6月
・秋田県花岡鉱山で強制労働者として連行された中国人が集団脱走、鎮圧で死者四一八名。
・国民義勇兵役法公布。一五歳以上六〇歳以下の男子、一七歳以上四〇歳以下の女子を国民義勇戦闘戦隊として編成。
▼7月
・主食の配給は一日一人二合一勺。

さて太宰は、この年三月末に家族を甲府に疎開させ、石原家に滞在させている。太宰は単身で三鷹に住んだが、四月二日と四日に空襲に遭い、自宅一帯が爆撃された後は、甲府の石原家に身を寄せた。疎開生活の中で太宰は着実な執筆活動を続けている。

「あ、鳴つた。」／と言つて、父はペンを置いて立ち上る。警報くらゐでは立ち上らぬのだが、高射砲が鳴り出すと、仕事をやめて、五歳の女の子に防空頭巾をかぶせ、これを抱きかかへて防空壕にはひる。既に、母は二歳の男の子を脊負つて壕の奥にうずくまつてゐる。（「お伽草紙」前書き）

「お伽草紙」は、空襲のさなかに防空壕に身を隠しながら子供に語り聞かせるお話の、裏話という設定で語りだされる。前掲の「前書き」を三月一一日頃に書き終え、続いて五月七日までに「瘤取り」を脱稿、八日から「浦島さん」の稿を起し、「カチカチ山」「舌切り雀」を含む「お伽草紙」全四篇二百枚を完成させたのは六月末であった（山内祥史『太宰治の年譜』）。すると「お伽草紙」は、三鷹から甲府への太宰の疎開生活の傍らで書き継がれた作品といえる。さて昔話のパロディのスタイルをとる「お伽草紙」は、時局に切り結ぶ要素は少ないように見えるが、

浦島はやがて遥か右上方に幽かな、一握りの灰を撒いたくらゐの汚点を認めて、／「あれは何だ。雲かね？」と亀に尋ねる。（中略）／亀はにやにや笑つて、／「あれは、鯛ぢやないんだ。海の火事だ。ひどい煙だ。あれだけの煙だと、さうさね、日本の国を二十ほど寄せ集めたくらゐの広大な場所が燃えてゐる。」

「やあ、燃える、燃える、大火事だ。」――浦島と亀が目撃する「海の火事」の、あっけにとられる他ない大規模の破壊は、空襲の記憶に結びつくものとも読める。また当初、「瘤取り」「浦島さん」「桃太郎」「カチカチ山」「舌切り雀」の五編を書くつもりだった太宰が、どうしても「桃太郎」を書くことができず、収録作品を四編に留めたという事実（「舌切雀」冒頭で語られる）にも、汲むべきものがあるだろう。〈桃太郎〉は古くから親

【文化】

▼5月

・「日本剣豪伝」（東宝映画）

・桜井忠温「肉弾　飛機、戦車、わが肉」（「朝日新聞」8日）

・高村光太郎「平常心を豊かに」（「朝日新聞」10日）

・岸田國士「其日、其日の気持」（「信濃毎日新聞」26日）

▼6月

・「義烈空挺部隊映画―日本ニュース第二五二号―」（6日）

▼7月

・内山基「一滴の血落ちて潔くば花咲かむ」、神崎清「巽艦撃退」（「少女の友」）

▼8月

・大仏次郎「英霊に詫びる」「朝日新聞」21日）

・吉川英治「慙愧の念で胸さく」（「朝日新聞」23日）

・大田洋子「海底のやうな光―原子爆弾の空襲に遭つて―」（「朝日新聞」30日）

しまれる昔話であるのみならず、明治時代より尋常小学校の国語読本に掲載されてきた、日本男子の英雄像の典型だったからである。さらに〈桃太郎〉は、太平洋戦争下においては、〈鬼が島〉としての大陸へ渡って敵を征伐する英雄として表象された。このような極めて時局的な表象に、太宰は触れることをあえて避けたのかもしれない。そして戦後、「お伽草紙」は一〇月二五日、筑摩書房より書下ろし創作集として刊行された。

さて七月六日深夜、甲府市街もアメリカ空軍機B29型重爆撃機による空襲を受け、石原家が全焼する。この時の体験は、「薄明」（『薄明』一九四六・一一、新紀元社。ただし一九四五年九月には脱稿していたと考えられている）に描かれている。

七月二八日、妻子を連れて津軽へ出発、三一日に金木の生家へ辿り着いた（山内祥史『太宰治の年譜』）。津軽疎開の道中の様子は、「庭」（「新小説」第一巻第一号、一九四六・一）、「たづねびと」（「東北文學」一九四六・一一）に描かれた。そして太宰は八月一五日の終戦を故郷金木で迎え、戦後もしばらく実家での疎開生活を続ける。

東京三鷹へ戻ったのは、一九四六年一一月一四日のことであった。

＊＊＊＊

火野葦平「あゝ火箭の神々」は、「神雷特攻隊を讃ふ」と題して「朝日新聞」一九四五年六月五日に発表された。

水ぬるみ、／菜種は黄に、／麦やや青きころ、／虹の門をひらきて／神雷特別特攻隊出撃す。／穹をさく光芒火箭となつて／敵艦のふところに炸裂すれば、／一瞬／銀の水柱天心をつき、／海洋は敵に墓場となり、／海洋はわれに花園となる。／げに神の雷はすさまじくも美し。／／私は忘れることができない。（中略）／しかもこれら紅顔の若人たちは／ひとたび出撃してゆけば／たれ一人帰つて来なかつた。／／

「私」が特攻隊員たちに向けるまなざしは、当時の新聞メディアが提供していた〈特攻隊〉表象を忠実に支持するように思える。伝統的な日本の自然美を背景として、厳かに出

【代表作】

▼5月

・高村光太郎「海軍記念日に」（「週刊少國民」27日）

・井伏鱒二「里村君の絵」（「文藝」5・6月合併号）

▼6月

・岩田豊雄（獅子文六）「女将覚書」（「週刊朝日」17日～9月9日）

・三好達治『干戈永言』（青磁社）

・半田義之『珊瑚』（新太陽社）

▼7月

・釈迢空「島の青草」（「週刊毎日」8日）

▼8月

・釈迢空「悲痛なる美を完成する人々特攻百首」（「毎日新聞」1日）

・高村光太郎「一億の号泣」（「朝日新聞」17日）

・川田順「八月十五日正午」（「朝日新聞」22日）

▼9月

・太宰治『惜別』（朝日新聞社、5日）

撃してゆく「神雷特別特攻隊」が、神気を放つ崇高な戦いを繰り広げ、戦果をあげるさまが文語定型詩を意識した語りで重々しく描かれる。この第一連が〈特攻隊〉の公の面を歌いあげるとすると、「私は忘れることができない」と語りだされる第二連以下は、特攻隊員の私的な面―飴色の革靴を履き、時計を持つなど―を口語自由詩ふうに歌う。しかし「ひとたび出撃してゆけば／たれ一人帰つて来な」いとされる「これら紅顔の若人たち」は理想的かつ類型的な兵士であり、彼らの個性は描かれない。

戦争詩が、「一億」「我ら」といった集団的な仮想主体を立ち上げ、人間の〈個〉を描かなかったことについては先行研究で重要な指摘がなされている。（北川透「萩原朔太郎の戦争―〈ひとり〉が複数である場所―」、「現代詩手帖」一九九九・二、思潮社。瀬尾育生『戦争詩論』二〇〇六・七、平凡社、他）。例えば高村光太郎「彼等を撃つ」は、「《大詔》に答えることで、《一億》を主格としたまったくあらたな定型を出現」させた（瀬尾前掲書）。この「〈ひとり〉の複数形ではなく、国家や〈国民〉、民族などの集団をあらわしている」（北川前掲論文）我らとしての〈一億〉は、敗戦のインパクトを経ても保持された。

高村光太郎「一億の号泣」（「朝日新聞」一九四五・八・一七）はこう歌う。

綸言一たび出でて一億号泣す／昭和二十年八月十五日正午／われ岩手花巻町の鎮守／
　烏谷崎神社社務所の畳に両手をつきて／天上はるかに流れ来る／
　玉音の低きとゞろきに五体をうたる／五体わなゝきてとゞめあへず／（中略）

わななく「われ」は、天皇の「綸言」の前に額づき、敗戦後もやはり《一億》として号泣するのである。こうした集団的主体としての《一億》に憑かれた戦争詩は、総力戦体制下で大量生産され、類型化したファンタジーを文語定型で歌い上げる装置に堕していた。ひるがえって太宰は、あくまで「私は多少でも自分で実際に経験した事で無ければ、一行も一字も書けない甚だ空想が貧弱の物語作家である」（「舌切雀」）という保塁に踏み止まり、敗戦後もこの「個の視点」から語り出してゆくことになる。